

子どもの笑顔をつなごう

- 心の教育：「いのち」・「国際理解」の道徳 -

道徳教育班 長期研修員 田沼 正一 久保 えり子

はじめに

時に感動で目を輝かせ、時に世の中の矛盾に憤り、目を潤ませながら自分の思いを伝えようとする生き生きとした心の子どもたちを育てたい。目の前にいる子どもたちは、もっともっと輝きたいという思いをもっているはずである。その思いにどう答えたらよいのか。これが我々道徳教育の研究の出発点である。

今、学校では「心の教育」が重要課題として取りあげられ、豊かな心の育成に向けた取組が始まっている。地域の特色を生かした体験活動を取り入れた総合的な学習の時間の充実等がその対策の一つであろう。そういった状況の中で、心の教育の基盤となる道徳教育の現状について次のような調査結果(H15「群馬県道徳教育推進状況調査結果」より)がある。

< アンケート・年間指導計画の見直しについて >

(該当するものをすべてを選択)

質 問 項 目	小学校 333校	中学校 171校
1 全体計画や重点目標、指導方針との関連	116	63
2 複数学年を見通した内容の重点的取扱いや関連的指導	54	36
3 主題の配列や指導の時期	146	80
4 個々の主題のねらい、資料、主題設定の理由	53	20
5 個々の主題についての展開の大要、指導方法	45	21
6 他の教育活動における道徳教育との関連	140	66
7 見直していない(上記1～6に該当なし)	86	44

アンケートの結果により、多くの学校が取り組んでいる「全体計画や重点目標、指導方針の見直し」「主題の配列や指導時期」「他の教育活動における道徳教育との関連」の3点からは、多様化する子どもたちの価値観に対応していこうとする学校の努力が伺える。しかし、対象である子どもたちは、道徳の時間に満足している小学生45%、中学生4.9%という残念な結果(H12道徳教育推進状況調査)が出ており、その現状はあまり変わっていないのである。教師自身も道徳教育推進の難しさについて次のような点を挙げている。

副読本に頼った通り一遍の授業で、心に揺さぶりがかけられない
価値項目にあった資料の開発不足
本音に迫る発問の工夫がなく、ワンパターンの発問の繰り返しとなっている
資料から離れ、自分の事として価値項目を引き寄せる仕掛けが展開の中で作れない
普段の自分を振り返り、じっくりと自分の心を見つめさせる問いかけの難しさ
価値の取り扱いが難しく、1回の授業では子どもの内面に迫れない
教師の価値項目の理解不足

そこで、道徳教育班として注目したのが、「1回の授業では子どもの内面に迫れない」という問題点である。年間35週の授業に対して道徳の指導項目は23である。学校では、重点指導項目を掲げて「心の教育」に取り組んでいるところが多いこともあり、重点指導項目を数時間で扱っている現状がある。それをより効果的に実践する方策として、関連価値を連携させた複数時間での取扱いを考えた。

また、価値をつなげた複数時間の取扱いで、子どもたちが何を見つめ、何にとまどい、どのように学んでいったのかといった心の過程を追いながら指導することができると考える。

道徳の授業への道

Step1 目指す子ども像をはっきり言い切りましょう!

私たちは、こんな子どもたちであってほしいという思い、願いをそれぞれもっています。その思いの実現化は、学校課題を把握した全体像の中から、目指す子どもたちの姿を明確化にし、重点化を図った土台作りに始まります。

道徳全体計画の重点指導目標を自分の学年・学級の生徒に当てはめ、「 な子にしたい! 」と言いきる到達目標をしっかりとつことが大切なのです。

Step2 関連価値を連携させた道徳学習で子どもたちの心に揺さぶりをかけましょう!

重点化しただけの1時間の道徳で、思う存分目指す姿に迫るには少々無理があります。しかし、道徳の価値項目数は23、授業時数は年間35時間と授業時数に余裕があり、工夫可能なのです。この時間を有効活用として、他の価値と組み合わせた連携道徳を提案したいと考えました。

我々道徳教育班は、「国際理解」「生命の尊重」を重点指導内容として、他の関連価値と組み合わせた5時間の授業を構想することで、子どもの価値の内面化に向けて勝負をかけました。

Step3 支援は子どもの思いに寄り添うことが柱です!

この5時間の構想のポイントは、子ども自身の問いの連続・発展性です。つまり、5時間の中で分からない自分があることが大切で、その分からないことを、授業を通して得られた情報を活用しながら、自分たちで価値をつなげ、自分で考え、振り返る一連の学びのスケッチを子どもたちに作成させる。子どもたちは自分の成長をその中に認め、価値が深められると考えるのです。

しかし、こういった学習の流れは子どもたちだけでの実現は無理なのです。そこで、教師による支援が必要となってきます。提示する資料、教材の提供の仕方、グループ活動の取り入れ、発問の工夫といった多様な教師側の工夫は、子どもたちに情報を整理しながら問いを生み出させるための支援活動なのです。当然保護者や地域人材の活用も子どもたちの活動を支援するためのものですが、主体は子どもたちです。

共に考える道徳授業、子どもたちが自ら学んでいく今日的道徳に向けて、このような流れを大切にしたいと道徳授業を作っていきたいと考えています。



道徳授業を変える **木(気)** を育てませんか?

— 3ポイントを **心** でつないで —